

HOUSE OF THE YEAR IN ELECTRIC 2010

国土交通省外郭団体(財)日本地域開発センター主催 ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック 2010

「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック」主催(財)日本地域開発センター[事務官庁:国土交通省]において、松下建設の「ハイブリッド・エコ・ハートQ」が、昨年度に引き続き、特別賞・地域賞をW受賞、特別賞は大賞に次ぐものとして受賞しました。偏にお施主様のご協力の賜と衷心より深く感謝申し上げます。

◆2009年:【ハイブリッド・エコ・ハートQ】優秀賞・地域賞
◆2010年:【ハイブリッド・エコ・ハートQ】特別賞・地域賞

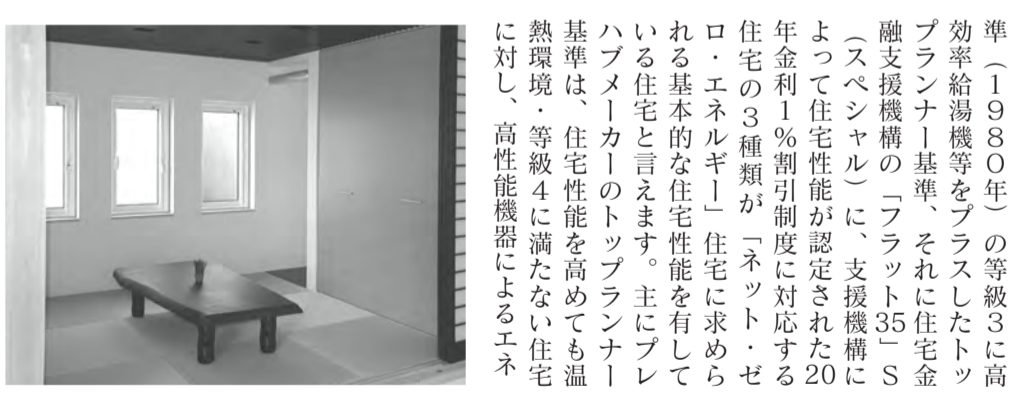
山田展示場 山田展示場は、お陰様で販売完了致しました。ご見学は、8月末日までで終了致します。

鹿児島県鹿児島市山田諏訪下 5867-2



新築後、展示場として貸して頂ける建主を募集しています。

地域の皆様へ、より素晴らしい住宅を知って頂くため、新築後3ヶ月間、展示場としてお貸し頂ける住宅を募集しています。



ネット・ゼロ・エネルギー住宅を存じますか?

我が国では、ほぼ10年の周期で、住宅の方向性を決める国家総合プロジェクトが開催され、今年10年間で「ネット・ゼロ・エネルギー住宅」を目指すという概念が示されました。その内容は、家庭で使用するエネルギーを家庭で造り出すエネルギーで賄おうというもので、造り出した自活エネルギーの総和で、使用するエネルギーの0を目指すという考えです。そのために

ネット・ゼロ・エネルギー住宅が目指す住宅性能とは?

「ネット・ゼロ・エネルギー」住宅が目指す住宅性能は、温熱環境、等級4以上を基準にしています。これは「次世代省エネルギー基準」(1999年基準)に耐震性や高齢者等への配慮をプラスして、指定検査機関の検査によって認定する「長期優良住宅」や新省エネルギー基準(1980年)の等級3に高効率給湯機等をプラスしたトップブランド基準、それに住宅金融支援機構の「フラット35」(スベシャル)に、支援機構によって住宅性能が認定された20年金利1%割引制度に対応する住宅の3種類が「ネット・ゼロ・エネルギー」住宅に求められる基本的な住宅性能を有している住宅と言えます。主にブレハブメーカーのトップブランド基準は、住宅性能を高めても温熱環境・等級4に満たない住宅に対し、高性能機器によるエネ

松下建設の「エコ・ハートQ」(次世代認定取得)「ハイブリッド・エコ・ハートQ」(型式認定申請中)

は、10年後に標準基準となる新築現場でチャレンジしようとしているのは、南九州での「ネット・ゼロ・エネルギー」住宅を一步進めた高性能Oエネルギー住宅です。ヨーロッパでは、Q値(熱損失係数)やμ値(日射取得係数)を基準とする日本の基準から、「年間冷房暖房負荷15kWh/m²」をこの住宅性能としています。住性能の基準は、住宅で使用する冷暖房エネルギー量を性能の基準としているため、かなり合理的な性能基準と言えます。しかしヨーロッパの場合は、寒冷地の無暖房住宅が主流ですが、蒸暑地域の南九州では、冷房エネルギーの削減が重要になります。松下建設の新築現場は、お客様との協力と近畿大学建築学部の岩前学部長の監修を得て、この秋に建設されます。今後、この住宅の進捗状況をお知らせ致しますので、松下建設の新築現場にご期待下さい。

0120-079-089

展示場見学ご希望の方は、お気軽に、右記フリーダイヤルにてご連絡下さい。また、住宅に関する資料等も是非、フリーダイヤルにてご請求下さい。資料等をお送り致します。

ひこうき雲

発行所 株式会社 松下建設
発行人 松下孝行
編集責任 齋藤恭誠

■本社
〒891-0108
鹿児島市中山1丁目14-29
TEL 099-267-7594
FAX 0120-079-089

脱原子力発電の鍵を握る住宅の高性能化と「ネット・ゼロ・エネルギー」住宅。

我が国の住宅は、どのような方向に向かうのか、よく確かめて下さい。

蓄電池や新燃料開発・技術革新!!

ネット・ゼロ・エネルギー住宅という理想が現実。

自給エネルギー装置は、実用段階になっているのか?

「スマートハウス」や「ネット・ゼロ・エネルギー」住宅など、耳慣れない言葉がマスコミに登場しています。

「スマート・ハウス」については、スマートフォンなどで、住宅の内部の照明や電力の使用をコントロールできる省エネ住宅のことです。

「ネット・ゼロ・エネルギー」住宅は、自給エネルギー時代を象徴した言葉となっています。

脱原発が叫ばれている今、大がかりな発電ではなく、ガスタウンなどを使用する小規模な地域的な発電を主流に据える事が考えられています。

「ネット・ゼロ・エネルギー」住宅の主要エネルギーは、太陽光発電になるものと考えられますが、その他天然ガスを利用する燃料電池等が家庭用発電の主流になります。

太陽光発電は、高性能住宅であれば、既に実用化段階に入っていると言えませんがランニングコストとメンテナンスコストの比較では、完全に実用化段階とは言えない部分もあります。それは、周辺機器の耐用年数と発電量の関係です。

しかしながら、蓄電池やEV自動車の普及によって、家庭用の蓄電が可能になれば、かなり新しい方向性が見えてきます。太陽光発電の電力を売電に頼ることなく、自家消費できる体制が整うからです。なぜ、売電に頼れないかというと、自然エネルギーの全量買い取りが実現したとしても売電料金は、現在の太陽光発電の1kW42円などは夢のまた夢で、だいたい15〜10円以下と試算されています。しかしながら売電価格は下がっても、電力料金が脱原発によ

今すぐ設置した方が得か、もう少し待つべきか?

この選択は非常に難しい選択です。松下建設の「ハイブリッド・エコ・ハートQ」の場合、住宅の大きさにもよりますが、40坪程度であれば3・5kW程度の太陽光発電で充分

発電機器は、今後どの様に発展するの?

太陽光発電にしても、燃料電池にしても、発電力が年々向上しています。更に新規参入の会社が増えて、中国製、韓国製などの海外製の製品は、現在でも3・5kW程度の製品で150万円程度で設置可能な製品も販売されているようです。

現在では、性能に定評のある国産品も、普及が進むに連れて安くなる傾向にあるようです。松下建設では、資金的に余

住宅性能が自活エネルギー設備の資金を生む?

高性能住宅は、省エネルギーで生活が出来ます。一般住宅との光熱費の比較では、約10年で24000円の差が出来ます。この差額で充分、自活エネルギー装置が取り付けられます。

資金的に余裕がない場合は無理をしないで...

無理をしないで下さい。太陽光発電を取り付ける資金のために、住宅性能を犠牲にしている方もいらっしゃいますが、性能の悪い住宅に無理して太陽光発電を乗せても、10年程度で設備資金の回収が出来なければ、ランニングコストよりもメンテナンスコストの方が大きくなってしまいます。それならば、今すぐに太陽光発電等の自活エネルギー装置を取り付けるよりも、住宅性能を高めに資金を振り分ける事をお勧めします。住宅性能を「長期優良住宅」基準で造っておけば、いつでも自活エネルギー装置の取り付けが可能です。高性能住宅の資金は100万円〜200万円を上乗せするだけで充分です。高性能住宅ならではの設備機器がリーズナブルになってから、いつでも最高の設備の設置が可能になります。

▼台風が来ていますが、例年になく大型で、しかも大陸に向かって東進しています。中国本土や北朝鮮に、大きな被害を及ぼしているようです。幸いにも、未だに鹿児島には上陸していませんが、毎日のように南国のようなスクロールが襲ってきて雨量も多く、工事が停滞して困っています。

▼国会の審議の遅れで、フラット35Sの1%、20年金利優遇型は、資金が底をついて12月末日までの予定が9月一杯で終了になるようです。住宅版エコポイントも時期を待たずして終了してしまいがちです。住宅関連の補助金は、ほとんどが終了に向かっています。早期に修正予算(第三次)を組んで頂かないと建築業界はかなりの日本景観に悪影響を及ぼしてしまいます。

▼福島原発事故は、我が国のエネルギー事情を大きく転換させようとしています。電力会社の独占から、民間主導の電力再編が始まるようになってきます。今まで表に出てこなかった商業用蓄電池の存在なども始まるようになってきます。東北電力秋田能代火力発電所では、ナトリウム硫黄電池(NAS)出力2000kW×40台の設置を開始しています。これは数ヶ月で設置が完了し、この様な商業用での蓄電池も既に実用化段階にあることが、今回の原発事故で改めて明らかになりました。